**読書ノート**

2016.11.26/小林

1. **岡本浩一「会議を制する心理学」（中公新書、2016年1月）**
* 前回、佐々木さんから同著者「無責任の構造」、小林から同「権威主義の正体」「属人思考の心理学　組織風土改善の社会技術」を紹介。不当･違法な意思決定はしばしば会議でおこなわれることから会議のあり方が重要。
* 1999年の核燃料製造会社JCOによる放射能被ばく死亡事故では違法なｳﾗﾝ燃料製造方法が会議で決定された、三菱自動車ﾀｲﾔ脱輪事故の対策会議でﾘｺｰﾙ隠しが正式に承認された。
* 会議という集団での意思決定では心理的要因で往々にして正しい結論に導かれない。その心理的要因を知って、対応策を学ぶことが大切。
* まず、日本での会議の特徴：①票決を避けて全会一致を志向する、②発言しないことよしとされ、反対意見は会議への非協力とみなされる風潮がある、③反対者退席のスキに・体力勝負で強引に可決するようなことがある、④挙手も記名投票と同じ、投票は無記名ですべき、日本人はこの意識が低い、⑤事前の根回しがある場合あり、⑥前例がないことで否決されることがある、⑦手続きの軽視、懲戒処分決定の会議は匿名で審議すべき、欧米では手続きが重視され手続きに瑕疵あれば決定は原則無効となる。
* 正しい結論に導かれない心理的要因

①人間はその意見が「おかしい」と思っても多数意見に同調しやすい（ｱｯｼｭの同調実験）、複雑な問題ほど同調しやすい

②集団で討議するとﾘｽｸの高い結論を選択する傾向がある、積極的な・勇ましい結論が好まれる

③ﾌﾞﾚｰﾝｽﾄｰﾐﾝｸﾞの罠、四人でﾌﾞﾚｽﾄしたときと四人個別にｱｲﾃﾞｱ出しした場合、四人個別のほうが優れたｱｲﾃﾞｱが出た、これは集団だとa)他人に否定されることをきらいｱｲﾃﾞｱを出しにくい、b)各自発言量を他者と同じくらいにしようとする、c)他者が良いアイデアを出していれば自分はそんなに発言しなくてもよいだろうと思う人が出てくる、d)他者発言中は発言できないのでｱｲﾃﾞｱ出しがさまたげられる

④全体で多数派でも少人数ｸﾞﾙｰﾌﾟに分けて討議するとｸﾞﾙｰﾌﾟごとの結論は結論保留が多数になり多数派の意見が通らないことがある、たとえば4/6→2/2、2/2、0/2の少人数ｸﾞﾙｰﾌﾟに分けたら多数派が勝てるのは0/2のｸﾞﾙｰﾌﾟだけ

⑤情報共有は難しい、三人の委員長候補者について異なる情報（ﾌﾟﾗｽ情報/ﾏｲﾅｽ情報/中立情報）を与えられた四人のｸﾞﾙｰﾌﾟで討議してその三人の中から委員長を選ぶという実験をした（ｽﾀｯｻｰ他の実験）→共有されている情報についてはよく話し合ったが共有されていない情報についてはあまり話されなかった、つまり自分の結論を強化する情報・意見についてはよく話し合うが、少数意見になりそうな情報（自分しか知らない情報）については話しにくいということ→仮に十分に情報共有できればﾌﾟﾗｽ情報の多い候補者が選任されたのに実験ではそうならなかった

⑥社会的手抜き：会議で自分一人ぐらい発言しなくてもよいだろうという手抜き（傍観者）、傍観者が多くいる会議である人が意見を言い、その意見をすぐに支持する人（追随者）があらわれるとその意見が多数意見であるかのようになってその意見に反対するのが困難になる、反対意見をもっていても「反対は自分一人かもしれない」と思い込むとその人も傍観者になる（社会的手抜き）、しかも上位者が支持するとそれは「同調の強要」になり下位者は違法な意見と知りつつそれに服従してしまう（ﾐﾙｸﾞﾗﾑの電気ｼｮｯｸ実験）

⑦議長の威圧的態度/発言が他者の発言を抑圧する、たとえば社長が議長になって「本件について異議ありませんね」と言ったら「異議あり」と発言するのは困難、

* 会議を正しい結論に導くための対策

①傍観者にならないこと、表現を柔らげれば反対意見も言いやすい、「私が過剰に心配しているだけかもしれませんが・・・というリスクはないですか？」とか

②特に反対意見をいうときには自分の意見を文章にしそのうえで発言する、そうすると効果的な発言ができる

③専門性を高めておく、これにより自分の反対意見を根拠を示して言うことができる

④正しい反対意見は小さい声でいうこと、「**そんなのおかしいでしょ！**」などと大きな声で言ってはならない、感情的な反対意見では相手も感情的になってしまう

⑤議事終了後の追加発言で反対意見を言う、議長「それではこれで終わります」のあとで、「一つ確認させてもらっていいですか？・・・」と言ってやんわりと反対意見を言う

⑥属人主義＝誰々の提案だから賛成/反対するではなく、属事主義＝誰の提案かに関係なく提案内容で是非を判断する

1. **鈴木孝夫の「対象依存型の言語的自己規定」について**「ことばと文化」（岩波新書、1973年5月）より
* 1926年生まれ、都立戸山高卒、慶大名誉教授、現日本野鳥の会顧問他、今年の「新潮45」7月号に論文が掲載されている（日本語を習得した外国人は攻撃的な口調が減る、言語習得は文化の習得）
* 9月の研究会で鈴木孝夫の説として「家族内での人称が最年少者を基準としている」ことに触れました。以下において、本書「ことばと文化」の第六章のそのまた一部からこの鈴木説を詳しく報告します。
* 日本語における家族内での人称の法則
* 相手の存在を前提とした相対的自己規定：父親が自分の子どもにたいして「お父さんの言うことを聞きなさい」というが、「わたし/ぼくの言うことを聞きなさい」とは普通は言わない、また、その父親は自分のおい/めいに「ｸﾘｽﾏｽにはおじさんがﾌﾟﾚｾﾞﾝﾄを買ってあげよう」という。これに対して欧州諸言語は絶対的自己規定であって、誰との会話でも「I/Je/Ich」は不変。
* この相対的自己規定は、家族内の最年少者（最下位者）が基準となって自己を規定する、つまり、孫が生まれれば孫から見て自分は何なのかにより自己規定される、今まで「パパ/ママ」だったのが「おじいちゃん/おばあちゃん」になる。したがって、自分の子どもから「おじいちゃん、ちょっと」と呼びかけられたりする
* 家族内で二人称代名詞「あなた/きみ/おまえ/他」も上下関係で使い分けられる、兄は弟に対して「あなた」ではなく「おまえ」が普通、逆に弟は兄に対して「あなた/きみ/おまえ/他」いずれも使わず「兄さん」を使うのが普通、たとえば「兄さん（一郎兄さん等）の意見に賛成です」
* 会社内でも部下は課長に対して「あなたの意見に賛成です」とは普通言わない、「課長の意見に賛成です」という（役職がなければ〇〇さん）、逆に課長は部下に対して「きみの意見に賛成だ」と言う、また店員は顧客に対して「とてもお客さまにお似合いですよ」と言うが、「とてもあなたにお似合いですよ」とは言わない、つまり日本語においては目上の者に対しては、極力二人称代名詞を使わないようにするのが普通
* なぜか？　佐久間鼎（九大教授、東洋大学長）によれば、 (1)古代日本語に一人称/二人称代名詞はなかった、「わたし/わたくし」は「おおやけ」に対する「個人的な」を表す言葉、これが転じて一人称代名詞になった、「あなた」は「彼方（かなた）」が二人称代名詞になったもの、(2) 歴史的に見て、一人称/二人称代名詞は使われているあいだに相手を見下すニュアンスが出てきた、たとえば、「僕」はもともと「あなたの下僕です」という意味だったが目上との会話で「ぼくの名前は〇〇です」と言ったら失礼になる、「貴様」はもともと敬語だったが「きさまの名前はなんですか？」と言ったらケンカを売っているようなもの→このようなことから一人称/二人称代名詞は口に出してはいけない「タブー」になった。
* ことばと行動様式
* (1)父親が子どもに対して自分のことを「パパ」と称するのは父親としての役割を確認することであり、また(2)子どもに子どもとしての従属的な役割を付与することになる、(3)同様に子どもが二人称として「パパ」と言うのは話し相手の父親に父親としての役割を確認し自分がその子どもであることを確認すること。(4)さらに父親が子どもを二人称代名詞･名前で言う場合（「太郎、おまえはちゃんと勉強しているのか」）、父親の上位者の役割確認を強化することになる、これに対して(5)子どもは父親を二人称代名詞･名前で言うことはない、これは日本人が対人関係の中で上下関係を重視していることであり、上下関係を確認しないと会話が円滑におこなえない
* 夫婦のあいだに子どもが生まれると夫は「パパ」と呼ばれ妻は「ママ」と呼ばれる、これは日本人は自ら選びとった役割よりも何らかのことによって与えられた役割（血縁関係など）をより重視するのではないか（自己規定が強い）、つまり夫・妻という役割は自分の意思で選びとったものだが、子どもに対するパパ・ママという役割は子どもの誕生によって与えられたものと認識されるのではないか
* 日本人は互いに相いれない「自己」を同時に持つことがにがて、たとえば「先生と同僚」、日本人の大学教員は同僚教員が自分の講義を聴講しに来ることを嫌う、つまり講義している自分は先生であると同時に聴講者との関係では同僚になり、この先生と同僚という互いに相いれない「自己」を同時に持つことに居心地の悪さを感じる、しかし米国人教員は同僚の聴講は光栄な事とよろこぶ（著者の米国での経験）
* 日本語の対象依存型の自己規定においては、相手の正体が決定するまでは「自己」も未決定であり、この未決定の状態では会話が円滑におこなわれない、日本人のガイジン･アレルギーはここから来るのか
* 対象依存型の自己規定においては、観察する自己の立場と観察される対象の立場が峻別されずにむしろ両者が同化される、つまり父親が自分の子どもに「パパの言うことを聞きなさい」と言った場合父親は子どもの立場に立っているということであり、このとき父親と子どもが同化している、これは他人の気持ちを察することがよしとされる「察しの文化」「思いやりの文化」に通じる、自分の意見を主張するのが苦手で他人の意見と自分の意見をどう調和させるかを得意とする、この対象同化の心的構造は土居建郎の「甘えの構造」に通じる
1. **長野晃子「日本人はなぜいつも「申し訳ない」と思うのか」（草思社、2003年11月）**
* 東洋大教授、リヨン大・ｽﾄﾗｽﾌﾞｰﾙ大客員教授
* ﾍﾞﾈﾃﾞｨｸﾄ「菊と刀」で日本は恥の文化、欧米は罪の文化といわれ、日本では他人の目がないところでは恥をかかないので悪事にはしる傾向があるとのこと。この画一的なモノの見かたは間違っている。なぜ日本では犯罪率が低いのか（諸要因を考慮しても）、恥の文化・罪の文化では説明できない。（下表は1987年、10万人あたり）

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 日本 | 米国 | フランス | 西ドイツ | 英国 |
| 殺人 | 1.3 | 8.3 | 4.1 | 4.3 | 5.5 |
| 強盗 | 1.5 | 212.7 | 86.9 | 46.0 | 65.4 |

* 日本人の遵法精神の高さはいたるところで見られる（外国人の指摘）：①小学生の電車通学（特に地下鉄）、②銀行の入り口がロックされておらず自動ドア、③銀行の窓口に防弾ガラスがない、④自販機が壊されていない、⑤タクシーでの忘れ物を運転手がホテルに届けてくれた、⑥ホテルの部屋に出しっぱなしの現金がそのままになっていた、⑦クリーニング屋から戻ってきた洋服のポケットに現金がそのままになっていた
* 日本人の犯罪に対する抑制心はどこから来るのか、罪を犯してはいけないという内面的強制力があるからだと思う。恥ずかしいからではない。民俗学者･柳田國男によれば日本人は「罪」という言葉を日常的に多用している。日本も罪の文化だといえる。ただし、欧米とは罪の意識が異なる。ﾍﾞﾈﾃﾞｨｸﾄはこれを見落としている。
* 欧米人の罪の意識：神という外部からの命令に違反することを罪と感じる。
* 日本人の罪の意識：自分の内部にある「他人に迷惑をかけてはいけない」という気持ちに違反したときに罪を感じる。
* 欧米人の罪の意識はキリスト教から来ており、親の子どものしつけも神の代理人として親が子どもに罰を与える（お尻をたたく）ことで子どもをしつける。最近までﾌﾗﾝｽの学校にはムチが普通にあった（先生が神の代理人）
* 日本では、子どもを押し入れ等に入れて「なぜ怒られたのか考えなさい・反省しなさい」と自分の心で「悪かった」と気づくことをうながしてしつける。道徳の教科書でも「してはいけない事」に自分で気づくことを重視している。
* キリスト教には罪を帳消しにする懺悔という方法がある、そのうえ現代はキリスト教への信仰心が薄らいできている。つまり自分の外部にあった神の存在が薄らいできている。これに対して日本では依然として悪い事を自分で気づくことを重視しているので自分の心の中に悪い事に対する抑制心が植え付けられている。
* 欧米の民話では人が悪い事をした場合、「悪魔にそそのかされて」と形容が付く場合が多い。これは罪の意識が外部からのものであることから、罪を犯した原因も外部に求めたのではないか。だから、欧米人は容易に自分の責任を認めないのではないか。米国での日本人ﾋﾞｼﾞﾈｽﾏﾝの経験談：部下にミスを指摘しても「I’m sorry」と謝られたことはほとんどない、通常は「Don’t worry」か「No problem」と返され、いやな気持にさせられる。
* これに対して日本人は罪の意識も罪の原因も自分の心の中にあると考えているので、ミス（罪）を指摘されたらすなおに「申し訳ありません」と謝罪できるのではないか。
1. **片田珠美「攻撃せずにはいられない人」（PHP新書、2013年12月）**
* 精神科医、「上司という病」青春新書、「なぜ怒るのをやめられないのか」光文社新書、その他多数
* なぜ人は他人を攻撃するのか、ターゲットにされる人、かわし方・守り方等について実例から解説している。

以上